

# 山と博物館

第45巻 第8号 2000年8月25日

市立大町山岳博物館



新緑と明神岳

撮影 大石 高志

「緑」それは心のオアシスだ

松原 繁

五月の初旬、里では代かきが盛んに行われ、早い農家では田植が始まる。残雪期の春山合宿に大谷原へ入ると、落葉松の芽吹きが始まっている。私はその芽吹きを見て今年の春山の状態を頭に浮かべる。芽吹き始めた鹿島槍の本谷や西沢にはしっかりと雪が残っていて、春山の楽しみを十分に味わうことができるのである。春先に山へ入って最初に緑だなあと感じるのは、この落葉松の芽吹きではないだろうか。そして五月の中旬頃のブナ林、ブナより少し遅れて岳カンバと続く。

私は四季を通じてそれぞれのすばらしい表情を見せてくれるブナ林がとても好きだ。そのフィールドは、サンアルピナ鹿島槍スキー場から遠見尾根の小遠見に続く黒沢尾根である。三月の中旬、山スキーを使うとこのブナ林へは二時間もあれば充分だ。ブナは冬芽の中で鱗片に包まれたまま芽吹きを待っている。山スキーで気儘に歩きまわられるブナ林は、身近にはここしかない。佐野坂を過ぎて、オリンピック道路から西方に見える稜線がそのブナ林である。今年三月に降った雪が多く、里から眺めても根元の雪が消えると同時に芽吹いて行くのがよく見えた例年より少し遅れているのをブナ自身が知っているのだろう。裸木の斜面でひとり青々と茂って丸い樹冠を広げているのが、まずブナと見えていと思う。この新緑のブナ林へ入ると、ここだけ空気が異なるのではないかと思うほど森の精気につつまれて、実にさわやかな気分になる。その森の中にタムシバが咲き、オオカメノキ、ムラサキヤシオツツジ、林床にはシラネアオイ、サンカヨウ、エンレイソウ、ツバメオモトが次々に花をつける。

一〇年前、崑崙山脈のムスタグ・アタ(七五四三m)の登頂を終え、緑の全く見えない上空を飛び、我家へ帰った朝、周囲の緑がきびしかった登山活動をいやしてくれたのを思い出す。

(大町山の会 会員)

# 残された三人の〈字〉

「西糸屋」を愛された岳人の絶筆・墨跡ものがたり②

奥原教永

松濤明さんの遺書

残された〈字〉の次の方は、岳人では知らぬ人はない。「西糸やニ米代借り、三升分」の辞を遺書の末尾に残されて、昭和二十四年（一九四九）槍ヶ岳の北鎌尾根で逝った、「風雪のビバーク」で知られる松濤明さんである。

昭和十四年（一九三九）、弱冠十七才にして、厳冬の北穂高岳滝谷第一尾根を、ガイドの上条孫人氏と初登攀され、戦時中すでに先鋭的なアルピニストとして名をなした。

松濤さんの宿は時に「常さ」の小屋、あるいは明神館、または徳沢だつたりしたが、足がかりはわが家ようだった。ここに昭和三十五年（一九六〇）、朋文堂発行「風雪のビバーク」の松濤さんの山行記録に、たまたまその気配を感ずるので、ここに要約・転載しておきたい。「〔〕内が転載部分で、そのほかは要約である。（一）は奥原注。

錫杖岳・穂高岳 パーティー 松濤明・権平完

昭和二十三年十月一日 鳥々からライトをつけて二俣、泊。

二日 徳本峠から上高地、泊。

三日 中尾峠を越え元鉱小屋（現・新穂高温泉のすぐ下流、今はない）泊。

四日 雨、宿の人は男一人、女四人の女護カ島で、うち二人はうら若いおじヨウサンだ。

五日 エボシ岩登攀。

六日 七日 雨、滞在。

八日 滝谷登攀―北穂高（滝谷を遡上してB沢から頂上へ着いている）

〔去年の秋から数えて四度目に、やっと懐かしい北穂の頂を踏んだ。じつに七年振りである。南峰の姿は大分変わったけれども、頂の気分はちつとも変わっていない。頂上の尖い岩も、ガレの広場も（滝谷を登って）と、いつもここでザイルを放り出してゴロリと横になったものだ、北尾根のカムも、それから、沈んで行く太陽も―何もかも懐かしくて、大きな声で何か叫んで見たいような衝動にかられた。

新しく建った北穂小屋に泊まり、小山兄弟の歓待を受ける。同宿五名の静かな夜、こたつを囲んでも足が冷たく、星が素敵に美しかった。遅くまで山の話に花を咲かせ、床についたのは二十四時近かった。

〔北穂高岳頂上付近には今でも「松濤岩」とクライマーに言い継がれている岩がある。〕

九日 奥穂より天狗沢経出、上高地へ十七時二十五分着。

〔お祭り（八日）には帰ってきますよ〕  
―そう言いおいて出た上高地も、もうお祭りはすんでしまっていた。「待っていたのに」とおバサンが残ったご馳走を運んできてくれる。なんだかとても満たされた感じだ。そして開ろりの火！〕

十日 帰京。

これが上高地のわが家での最後となった。私は不思議に松濤さんの二度の姿が、わずかながら鮮明に残っている。一度目は後述する鳥々の家であり、二度目はこの山行の十月

二日か九日の夜のことである。当時、私は高校三年生だったが、いくぶん胸部疾患の疑いを理由に、学校をサボっていたのか、あるいは秋休みであったのか、ちょうど上高地へ上がった。

当時のわが家には、六畳ほどの藁藪敷きの部屋の片隅に囲炉裏があり、その横に座って我々は食台に向かい夕飯を食べていた。そのとき、一畳分だけ食台からはずれて藁藪が敷いてあり、そこで松濤さんが、ご本人よりはるかに縦・横が大柄な権平さんに、次の山行きの同行を誘っているように見えた。具体的にどこの山とは、私の場所では聞こえなかったが、権平さんはあまり乗り気はないようだった。父は彼らのすぐ横だったから、北鎌尾根からの縦走と知っていたと思う。遭難後、父が「あのとき、権平さんが誘いに乗っていたら……」と口にしたことがあった。さていよいよ、その「風雪のビバーク」へ突き進むことになる。

次は松濤さんが帰京後すぐ、所属する「徒歩渓流会」へ提出した報告書からの抜粋である。「〔〕内は本人の文章のまま、ほかは要約である。」

〔十二月十二日、五時松本着。ただちに鳥々へ行き、西糸にて干飯・餅各三升依頼。……〕  
この日は大町へ泊まり、十三日から九貫目の荷物をボツカして、途中の岩小屋経出、北鎌尾根P2まで荷上げして、十六日松本へ着き、〔松本発19時38分〕で帰る。荷上げの目的は十分果たせた。干飯・餅は十九日までに作って貰うよう、改めて手配しておいた。〕

十七日朝、帰京した松濤さんは、またすぐ二十日に鳥々のわが家へ米・餅を取りにきて、二十一日からの日記が、遺体のそばから発見された、あの有名な片仮名書きの遺書である。

この二度の鳥々のわが家での滞在で、今でも目に浮かぶのは、襟に羊かと思われる真っ白い毛皮を縫いつけたウインドヤッケを着て、少し甘えた口調の松濤さんである。多分、北鎌尾根から西穂高岳まで、初縦走に賭けた晴れの装備と推察すれば、私が見たのはこの最後の二十日ではなかったか。

戦前、若くして先鋭的なアルピニストとして名を馳せた松濤さんは、戦後復員してから山登りを再開した。厳冬期、峻峻な雪と氷の岩稜が連なる槍ヶ岳の北鎌尾根から北穂高岳・奥穂高岳、西穂高岳を経て焼岳まで、まだ誰もなし得なかった縦走を計画し、昭和二十三年末、大町から高瀬谷へ入った。

パートナーの有元克己氏が少し遅れて合流し、十二月三十日から改めて二人での登攀が始まった。長いアプローチの高瀬川をたどり、北鎌尾根に取りつき、いくつかのピークを越え、難所の「独標」と呼ばれる岩峰を登攀し、鋭く天に突き上げた「槍」の尖峰を攀じ登って、ようやく第一の難関を突破するのだ。

尾根に取りついてから時間ならぬ雨に遭って、テントはばりばりに凍って使用不可能となり、雪洞とツエルト（緊急用簡易テント）での登攀のうえ、炊事用コンロが不調となるなど、悪条件での続行となった。

二十四年一月二日、連日の悪天候で進退の岐路に立たされるが、夜、星空となり、コンロも応急修理ができて登攀続行と決めた。しかし、またすぐ大風雪が襲来し、四日、露営条件が悪く有元氏は足が凍傷になる。五日、手もアイゼンバンド（金カンジキを靴につける布のバンド）も凍ってしまい、ついにアイゼンなしでの登攀中、有元氏は千丈沢側へ滑落して、登り直すことができなくなった。松濤さんは槍ヶ岳への計画をやめ、千丈沢を下るつもりで有元氏のもとへ下ったが、六日、大雪の積雪と有元氏の状況ではとても脱出できないと判断し、「有元ヲ捨テルニシノビス、死ヲ決ス」と遺書（注1）に記すことになる。

以下は同年八月二十三日、法政大学山岳部によって発見された遺体から少し離れて流失のおそれのない岩陰から防水紙に包まれて見つかった懐中手帳に記された遺書からの抜粋である。( )内は奥原注。

31日 アラレ、ミソレの中ツエルトでビバーク(準備不完全での露営)となった。雪が激しく降り、体が濡れて眠れなかった。

(昭和24年1月)

1日 大風雪 全身濡れて冷え切り、雪洞を掘って入る。全部脱いで乾かし、ガソリン消費大。ラジュニス(ガソリンコンロ)がまた不調となる。

2日 同じ風雪 停滞。ガソリンを直に焚いて水を作った。雪洞が雪で埋まり、何回も除雪した。登るか下るか決断を迫られたが、ラジュニスが応急処理も出来て、夜、星空となって続行と決める。

3日 (天気の記録はないが、就寝21・30 入口0℃)とあるから、午前中くらいは晴天で後曇り、気温が上がリ、天気は下り坂となったと思われる。

4日 風雪の中、北鎌尾根の核心部である「独標」といわれる岩峰を乗り越え、雪洞を掘ってビバークした。(以下、漢字以外は片仮名書きとなっている)

カンキキビシキタメ 有元ハ足ヲ第二度ト一シヨウニヤラレル、セツド一ハ小ク(小さく)、ヤ中入口ヲカゼニサラハレ全身ユキデアレル、

5日 フーセツ SNOWHOLE(雪洞)ヲ出タトタン全身バリバニコオル、手モアイゼンバンドモ凍ッテアイゼンツケラレス、ステツブカッタ(ピッケルで氷を削って足場を作ること)デヤリマデユカントセシモ(有元氏)千丈側ニスリップ上ガリナオス力ナキタメ共二千丈へ下ル、カラミ(から身)デモラッセ

ルムネマデ、15時SH(雪洞)ヲホル  
6日 フーセツ 全身硬ッテ力ナシ何トカ湯俣迄思フモ有元ヲ捨テルニシノビズ、死ヲ決ツス  
(この後、家族や先輩への別れの言葉がある)

手ノユビト一シヨウデ思フコトノ千分ノ一モカケズモ一シワケナシ、ハハ、オートトヲトノミマス

有元ト死ヲ決シタノガ6・00、今14・00仲々死ネナイ漸ク腰迄硬直ガキタ、全シンフルヘ有元MHERZ(胸)、ソロソロクルシ、ヒグレット共ニ凡テオハラソ(この後、三人の弟に、親への孝養を頼んでいる)

サイゴマデタタカウモイノチ友ノ刃ニスツルモイノチ共ニユク(松ナミ)  
(この間に有元氏が漢字・平仮名で別れの言葉を記している)

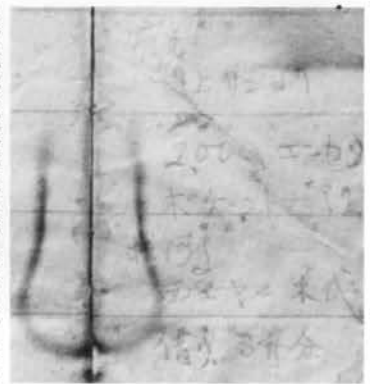
我々ガ死ンデ 死ガイハ水ニトケ、ヤガテ海ニ入り、魚ヲ肥ヤシ、又人ノ身体ヲ作ル、個人ハカリノ姿、グルグルマワル 松ナミ

竹越サン 御友情ヲカンシヤ 川上君アリガトウ(松壽)  
有元 井上サンヨリ2,000エンカリ ポケットニアリ

松壽 西条ヤニ米代借り、3分

以上で、この凄惨な遺書は終わっている。わが家にとって、常に消えない痛恨事は、この遺書のいちばん最後、命の尽きる寸前に「西条ヤニ米代借り、三分」と松壽さんに書かせたことである。

子、孫、曾孫を含め、戦後の食料難を体験しない次の世代のために、当時のわが家の苦境の状況を記しておきたい。人の死の直前まで、わずかな米代を請求したかのような強欲な父母と錯覚されかねないためにも、田んぼはおろか雑穀ひとつ取れない鳥々で



松壽明氏 遺書(松壽氏の山行手帳より)

は、戦後の食料不足は深刻だった。たまたま母の実家が農家であって、たまには白米が届いたが、母の兄を通じて父は何か所からも借金をし、母もそうそう実家を頼れなかった。配給の雑穀やら山菜など、口に入るものは何でも米と混ぜて雑炊として、飢えを凌いでいた。金さえあれば闇米も手に入ったろうが、わが家は最悪の状態で、とてもそんな余裕はなかった。

当時のわが家の経済状況を察するに、昭和十八年(一九三三)頃までは鳥々の家業であり、本業の雑貨屋もそこそこ繁盛していたが、父は上高地の営業を将来の本業としたので、鳥々の店を取り仕切っていた祖父母は、戦時下の統制経済の流れについてゆけず、手にしていた各種の専売品の営業許可を返上し、半ば閉店状態であった。加えて十二年から病床についた兄と、二十年から病魔につかれた姉の、保険診療でない当時のこと松本の伊東医院、波田村三溝の上条医院のタクシの往診による医療代が、入山者の途絶えた終戦前後の上高地の収入では、家計を重く圧迫していた。

そして決定的なピンチがわが家の一階埋没である。終戦直後の昭和二十年十月十日の水害によって、土砂が流れ込んだのである。急遽、物置としていた二階を仕切り、汚れた畳と藁を敷き、部屋として暮らしていた。もちろんガラス戸はなく、古びた障子で、天井

板などのない、薄暗い部屋だった。そのうえ、視力の落ちかけた祖父と腰を曲げつつ介護していた祖母は、離れてつくられたバラックの小さい小屋で、一代で築いた家屋敷を土砂に埋められ、災害を恨みつつ哀れな日々を送っていた。

こんな状態の鳥々の家に松壽さんがやって来たのである。二人の病人と年寄りにさえ十分の米が入手しにくいとき、あの世渡りの下手な父がどんな工面をして白米・餅を手配したのかと思うとその苦悩が察せられる。

屏風岩に賭けた岩岡繁雄さん、北穂高に生涯を捧げた小山義治さんほか、物資・食料の不足を山への情熱でかき消して、新記録をつくる大学山岳部への協力は、戦後の混乱期を家長として送らねばならない、世事にうとい父にとつて、不得手でも生きがいを感じるお手伝いだったのではないかと。

その意味で、松壽さんのこの壮挙に父は諸手を上げて賛成し、協力したに違いない。上条孫人さんが松壽さんのガイドであったから、案内組合の事務所であるわが家へは、松壽さんも戦時中から出入りしていたことだろう。その松壽さんが、わが家の苦境を知っての糧秣依頼であって、「米代借り」の「借り」は、父母の好意、人情の「借り」を表現したのではないかと、私は思っている。

茨木先生の遺留品の発見者が私の山の先輩・小山義治さんであり、この松壽さんの遺体の発見も、やはり先輩の傘木徳十さんであって、何か不思議な因縁を感じざるをえない。注1. この遺書は平成十年七月に松壽明さんの実弟・裕氏から大町山岳博物館に寄贈された。

(上高地 西条屋 山荘)

訂正とお詫び

第45巻第6号3ページ掲載の絵画写真下説明文に「白土谷」とありますが「白出谷」の誤りです。訂正させて頂くとともに、お詫びいたします。(編集部)

# イヌワシ飼育奮闘記 〈前編〉

横澤 志津



写真上：オス/下：メス

平成一〇年七月六日、待ちに待った日です。山岳博物館で飼育しているメスのイヌワシのもとへ、遠く仙台市八木山動物公園より待望のお婿さんがやってきました。当時メスは四歳。そろそろお年頃では？ ということで、フリーディングローン（繁殖を目的とした貸借契約）によって仙台からの婿入りが決まっ

たのは一月のこと。それから約半年、受入側の準備も終わり、少々興奮気味のオスが輸送箱に入って到着しました。博物館に到着したオスには、これからのお見合いのために、メスの飼育舎の隣へ入ってもらいました。当館で飼育しているメスは幼い頃に右脚を骨折し、半年ほど飛べない時期がありました。

そのため、成長した今もお飛ぶことが上手ではありません。そんなメスはよく地面にいます。しかも、お客さんが観覧する通路側にいて覗いたお客さんを驚かしているのです。「はたしてこんな調子で奥さんに、ましてやお母さんになんてなれるのかしら」と一抹の不安は心の中に残ったままの婿取りでした。普通、相性が悪い個体同士では、たとえ網越しだろうともけんかしたりするものなのですが、彼らとはとくに争う様子もなく、お互い相手に興味を持っていくようでした。オスの鳴き声もよく聞こえてくるということで（イヌワシは繁殖期になるとよく鳴くようになります）、一〇月二十八日、晴れて同居となりました。同居後、不安が的中しました。せっかくのカレシとの甘い同棲生活が始まったというのにメスは相変わらずの地面生活。あげくのほうには、自分を誘っているオスに対して怒りをぶつけるようになりました。万が一、二羽がケガでもしてはと、同居から約半年で二羽を隔離。再び網越しのお見合い状態となりました。しかし、ここで終わっては今後の見通しも暗いまま。私たちは用心しつつ、もう一度同居させてみようと考えました。イヌワシの産卵期は二〜三月です。まだぎりぎり間に合うかもしれないと、十二月一〇日、再同居させました。オスは前回の同居に比べ、メスに対してやや慎重になったように見えたのですが、それでも相変わらずメスを呼んだりそっと近づいてきたり。私たちはメスを説得したいような衝動にかられました。私たちやオスの気持ちを知ってが知らずか、メスは地面生活を

年も明けた一月十八日のことです。ふと作業の手を休めてイヌワシ舎をのぞくと、二羽が並んで止まっていたいました。しかも、地面でも餌台でもなく、私たちが中段と呼んでいる巣台より一段低い棚の上です。メスは何とか飛びあがれたようでした。その日からメスは地面と中段を行き来するようになり、まだ不安の残る中ではありましたが、「これはベアリングが成功したと考えていいのだろう」と私たちはちよっぴり嬉しくなっていました。

この頃からオスはもう巣作りにとりかかり、私たちが事前に巣台に入れておいた巣材を好きなように動かしていました。この様子は飼育管理舎のモニターで見ることができました。まだオスが来る前、巣の中の様子が見えるようにとカメラを設置してあったからです。二月に入ると、モニターにはメスの姿も映るようになりました。巣の中では、彼らが二羽で並んでいる姿も見られました。

しかし、この年、繁殖には至りませんでした。でも、出会って一年、まだまだこれから焦ってうまくいきません。私たちは二羽の仲の良さそうな様子を見て、「このベアリングは決して失敗ではない」と、翌年に希望をつなぐことができました。

（大町山岳博物館 動物飼育担当職員）

山と博物館 第45巻 第8号

発行 二〇〇〇年八月二十五日発行  
〒987-8501 長野県大町市大字大町八〇五六一

市立大町山岳博物館  
TEL 〇二六-一三二〇二二

FAX 〇二六-一三二〇二二  
印刷 大系タイムス印刷部

定価 年額一、五〇〇円（送料共）（切手不可）  
郵便振替口座番号 〇五四〇一七二二五三